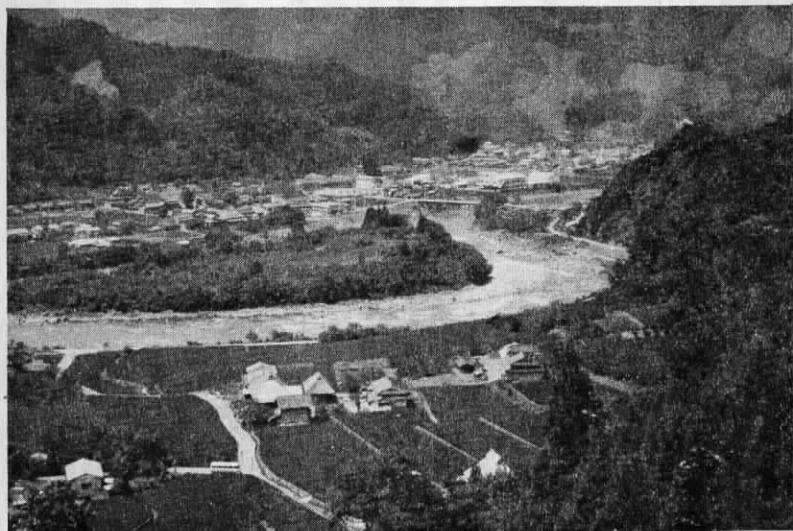


あらかじめ 失なわれていたものは何か

—記録映画「わが愛する緑の町」の背景—

村田達二



●一青年の实在を映像的实在として

大学を卒業して関西の一流会社へ入った地方の一青年が、自分の得た知能とそれを生かそうとする、言わば人生目的について大きな疑惑を感じはじめたとき……、それは折しも七〇年代の入口であり、諸々の企業内に於ける人間関係の古いきなりに根ざしたものを、資本という姿の中にありありと認めざるを得ない。それはどうにもならない自分が、身分的配置関係ともいえる不動な歯車の中にあることを実感したときであった。指標を喪失した労働運動が、この青年の見究めた状況に対しては何らの活力剤ともならなかったのは勿論、彼自身の内では、労働・政治・経済のそれぞれが全く均一化された文庫本の分類表の如く並ぶだけに止まり、思考の方向すら分断されたままにおかれていたのに相違ない。

我々がこの实在する青年に出会ったのは、これから述べようとする記録映画の舞台となった九州大山町のユース・ホステルであった。それはこの映画の取材以前であつたけれど、この青年の实在こそが、我々の映画作りのための、大きな契機となつたことは事実である。彼がこの山間の寒村の中へ持ち込んできた

その体験的な資本主義像と、彼の脱社会・人間観・価値観が、この大山町に於てどのよう
にフィットしてゆくのか、又これからフィッ
トしてゆくであろうか。それはこの映画を取
材してゆく過程で明らかにされるべきである
が、我々が彼にその視点をあわせたとき、す
でに作るべき映画の資質も彼と共に固定した
ようである。

我々が芸術活動をする場合、我々は何の目
的、誰のためのものを作ろうとするのかと
いう設問を通らずに進むことは出来ない。こ
の場合、九州大山町の中で我々は何をつかみ
だし、それを何の目的で視覚的に組み立てる
のか。そのような問題を我々はまず、この青
年の人生目的と共通する時点に於て把握しな
くしてはならない。つまり彼はこの映画の観客者
であり、同時に映画の中に登場する映像的存
在でもあることをまず確認する。この場合、
第一に重要なのは彼が観客者であることで、
この記録映画はあくまでも、この観客者とし
ての彼がこれから振舞うであろう未来体験の
世界を収録していくという仕事である以上、
その彼との関りあいを持つこの大山という町
の未来計画の方に大きなウェイトを持つこと
になるのである。

この町の未来計画とは何か？ 我々がこの
青年を見つけ出し、彼との接触を持つ以前に
於て、この大山の町の実像は、その歴史的な
探求によってあらかじめ知っていたことと、
もうひとつ、我々が目指していた人間変革の
実践的社会観によるテーマが、この町の未来
計画へのアプローチの方法に深い現実性を見
出し得るからに他ならない。

所謂「まちづくり」が権力者側からの押し
つけでなしに、地域住民のひとりひとりの自
覚によつて為されてこそ、真の「まちづくり」
であるということを目指した主張の運動方針
が、具体的に一九七一年になって全く意外な
ところから発表された。所謂、自治省のコミ
ュニティ運動というものがそれである。それ
は端的に言えば、戦時中のトントントンカラ
リの隣組というそれか、あるいは町の顔役的
な存在の果した上意下達の態のいい住民への
権力体制組織化の手段機構でしかなかった「町
会」の再現を否定するものである。それは、
きわめて民主的というか、人民の人民による
人民の政府建設への平和的脱皮を期待した運
動のように思える進歩的なものであつた。
一体、人民の人民による人民の政府(町会)
つまりコミュニティ形成というものが、非革

命の論理の中から誕生し得るであろうか——
そういう疑問を抱かないものはいないはずで
ある。非革命論理であるが故に政治官僚の社
会意識は健全であり、政策としての政治効果
を体制的に期待し得るものとされているわけ
であろうから、住民としての我々は一応にも
二応にも大きな疑いを抱かざるを得ない。我
々は戦中戦後を通じて、このような権力との
対応の中に於て何が我々のために利益となり、
何が我々のために害であつたかと世界的変
動の中で十二分に知ることが出来た現在を、
最も重く見る故に、この案なり運動なりの体
制側からの提示を不用意に受けとることは出
来ないのである。

●意識形成のためのオブジェとして

しかし非革命を前提する限りに於て、それ
は、ひとつの試行錯誤を内包するところのユ
ートピア的な現状革新案として肯けないこと
はない。言わば現下の日本共産党を左端とす
る一列横隊の各政党のどこでもが進歩性を主
張するときに示すそれと変りないものである
と言える。我々はこの一列横隊の隊列の中に
立つて民衆に向かつて何をしようというので
あろうか。

我々は民衆の中に弾丸を打ち込むような愚挙は絶対してはならない。こうした自戒の念を我々は常に抱きながらも、コミュニティプランを映画の主題のひとつとしてとりあげる必要を、その必然性を、人間の心情の問題として今こそ考えるべきであると思った。それは何故か？ 現に地方の至る所で頻発しつつある地域住民の公害闘争が存在しているからである。水俣をはじめとする環境汚染に対する反対闘争は、その地域の住民の中に於て惹起し、それは死活問題として隣人相集い結果し、真の住民とは何か、村とは何か、町とは何か、そして土地とは何か、生活とは何かを問いただし始めている。その闘争活動こそは、真の意味でのコミュニティ活動であり「町づくり」が一人一人の住民による自覚にもとづくものなのであるといえるだろう。

今日のコンピュータ的スピードと情報検索手段の超高度に発達した社会に於て、然も東大卒の俊英閣によって人材配備された上部政治機構に於て、このくらいのことが見透されない筈はない。コミュニティ作り、言わば旧町内会の否定の上に立つ再編成の目論見が何のために醸し出されたかは、ここで書きしるすまでもない。それは一列横隊の政治路線

が言うところの、民衆の意識の高まりによるエネルギーの量的圧力の歯止め役となるものである。その質的变化を暴力の名に於て差しおさえる手段として「眼には眼を」「歯には歯を」式の抑止力的発動の施策として見て差支えない。我々の作るべくして作ろうとする映画というものは、意識を問題とする以上、否、映画のセンチシヨナルパワーに期待するものが、意識発揚であるとする以上、我々がその抑止力となることは出来ない。つまり、かかる住民の住民意識のおくれをこそ中心課題とすべきであり、公害という形而上的な事象をつかまえるべくもなく、地域社会の中になお混在する多くの社会的矛盾の抽出によって、呼び醒ますべきものこそ、言うところのコミュニティ意識なのであると考える。我々の映画製作の目的は、前時代の抑圧の中に今また固定化されようとする多くの人民の心をよび戻すことではないか！ その意識形成の実践こそ貴重な人民のための教訓となり得ると考える。

意識は映像——ドキュメンタリーの中でどのように形成されていったか、それ自体非映像的な心象である。本稿の初めに提出した九州の青年の実在、我々にとって観客者の中の

不特定多数者の一人としての彼の発見は、その「意識」形成への手掛りとしての映像的実在・心象の実景として把え直すことであった。一九七一年のさる夏の日から始まったこの映像体験を更に潤化し、彼以外の大部分の世界、オブジェとしての大山町を、意識提出の上に役立てるべきもうひとつの要素として我々の前により大きく印象づけられるものは、言うまでもなくイストラエル・キプツという実在そのものであった。

人民中国の大同団体的展開以前に於て、我々の前にひとつの具現性をもって展開されていた共同体社会の意識形成は、我々にとってのコミュニティ形成への指標としてとらえるべき重要なオブジェである。キプツの実感的人間性の追求と多くの試行錯誤の体験が、今日の日本の多くの青年達の体験の中でどのような展開を見せているのか。その全体験の反省を含めて、日本社会のコミュニティ形成路線の上にどう反映し、どのような影響を及ぼしているか、この問題を具体的にとらえることができるはずである。

こうした最中に、イストラエル・キプツのあるメギド地区（町か村に当たる）と、この九州・大山が町村としては世界ではじめて「姉

妹町村」の友誼協約をしたことを知った。我々がこの大山の指導者である矢幡治美町長の名を知ったのはそのときのことである。そしてその直ぐ後のこと別なところで、この大山町が自治省案のモデル・コミュニティとなつて、全国三十何カ地の末端にその指命をうけて別記されているのを知り、我々は映画化の決意をより強く固め、大山町へと飛翔することになった次第である。

大分県日田郡大山町——なんの変哲も感じられないこの山間の村里がなんの故あつてイストラエル・キプツ部落と姉妹協定をしたのか、全くある朝起きてみたら素晴らしい共同体ができ、住民の意識は大きく発展し、明日への希望が燃えさかっているような話なのである。

●町長は町長として、亦農民として

古い共同体社会の原型は、近代化の進んだ地域からさほど離れていないところでも存在し得る。明治・大正・昭和の時代移行の中で、先進国に見る西欧的なコミュニティ意識は、我々の前時代の指導者たちにとってどのよう

に撰取されてきたのであろうか。封建的な支配権力によって、すでに前時代において定着・深化しつつした住民の意識構造は、そのと

きながらの根底的革新もなされずにそのまま温存されてきたといつてよい。明治維新による幕藩体制の崩壊は、ただ形態的なものであり、それに代置された天皇制はただ新しい皮袋としての役割しかならず、依然としてその皮袋の中の酒は古くさい封建の世の古酒であつたといつてよい。この辺の史学的説明は、遠山茂樹氏の明治維新論に明述された通りである。

古い盆踊りのしきたりだが、この大山の山村に例をひくまでもなく、全国至る所の山村にみるとおりであるが、これはたとえその形態を工夫し新しく塗りかえたにしろ、中味は百年前と変らぬ意識が伝承されてきている。この「伝承」ということこそ、大いに論議の余地のある問題である。今日の為政者が古典復活や伝承の所業を大いに奨励し、これの保存や育成に力をかすことは、それなり決して無意義なことではないけれど、その行事なり古事なりの中から一体何を汲みあげるべきかが明示されていない。この問題を住民の意識の変革の上はどう生かしていくべきかが、大山町においては一人の英智ある農民町長の指導下に検討され、それが村の経済的文化的発展の上にひとつのシンボルとして生かされ

てきている。それはゆるがせにされる問題であるが、この町の町づくりが住民のための町づくりという指標の下にこの伝承行事も大きく作用してきたのは事実である。共同体思想の基盤ともなるべき経済的諸問題の、就中、生産を中心とした町長の農業施策の苦闘史の上に、私は、この映画のストーリー形成の上でイマーシュの展開の可能性をつかむことができた。つまりその実践的な歴史過程の再構成によって、この町の現実と未来への足掛かりを得ようと言うのだ。

かつてはこの町の真中を縦断的に流れる大山川の氾濫ですっかりいためつけられたこの大山にも、その上流地点にある松原ダムが多目的ダムとして建設省によってつくられてから、近代的な明るい建物が見えるようになった。その中にひとときわ目立つのがこの町の経営による日田ユース・ホステルである。

我々が町長を町役場に訪ねて後、このユース・ホステルに宿泊したとき、初めて会った青年が、本稿の初めに話した青年である。彼はホステルのペアレックスとして働いていたが、関西のペアレックス製造会社を辞めて全国の農村遍歴の末、この大山農村にやってきたのである。矢幡町長の熱のこもった農業への卓見

に大いに動かされ、又実際に町を見て、ここの永住を決意したという。彼は地に足のついた農業労働によって人間としての生存価値を全身的にたしかめたいと願った。然し自己

資金を持たない彼には直ぐ購入すべき土地もない。そこでとも角、町役場の産業課に籍を置いて、このユース・ホステルの実務を自ら進んで担当することになった。彼を迎えた町の青年達は、この異郷者を温かく彼らの仲間

の組織「町を考える会」への入会を推め、ともにこの町の未来建設に大きな夢を託すことになった。そのメンバーがふるまっている。街の薬屋あり、僧侶あり、農業者あり、教師あり、町役場の官吏から農協の事務員ありで、

すべて三〇才前の人間であり、いわばジュニア級のものばかりの自主的な集会である。

大山は人口五二〇〇人、美しい日田杉で有名な幽邃境といえるほど清冽な山峡の村里である。今は梅と栗の名産地と変り、かつての閉鎖的な雰囲気も見られない明かるい町である——といえは下手な観光宣伝めいた文句に

きこえるので本意ではないが、梅栗をつくって親爺の笑顔かな

といった七五調の句碑を町の処々に立てているあたり、美しい緑の日田杉にかこまれた道

ならないというのである。まず所得をとる、次は知力をあげていく。そこに新しい欲求がでてくるから、その欲求を満足させるには矢張り近代的な施設で環境をつくっていく。環境が出来たら消費生活に資本が要る。その必要性によって、そして所得をあげようと頑張っていく。この三つを循環的に上げていきたい——そういう気の長い政策の展開を考えて、それをNPC運動と称した。

その第一次のNPC運動の主目標として所得増大をかざし、限られた土地での生産性をあげる作物として梅栗の生産地形成にのり出すことになる。これを運動としてとらえ、「ニューブラム・チエスナッツ」の英語の頭文字をとったNPC（梅栗）運動が、若い青年層の支持によって全村に繰りひろがってゆくのである。そしてついに十年後の今日は戸当たりの粗収入一〇〇万円平均という大きな成果をうるに至る。

次の問題は教育を主点とする「ニュー・パインナリテイ・コンベネーション」つまり第二次NPC運動は、人づくり運動ということになる。そのため各層の住民代表が集まって委員会が組織される。住民の意志を行政に反映させようというのである。こうして生まれ

を快調に車を走らせてゆくと、一体どこに五二〇〇人も住民達の熱っぽい住民意識がもっているのか……と疑わしくなる程の静謐さにおどろくのである。

我々が映像をもって語ろうとする住民のコミュニティ意識の盛り上りを何処に求めたらよいのか。折しも同じ大分県の臼杵市ではセメント公害に反対する漁民達の全住民あけての意識の昂揚があった。それは静寂そのものの臼杵の石仏群との対比によって一層浮彫にすることのできる素材であった。だがこちらは、それらの明確な素材とは程遠いものになってゆくばかりで、ゆけどもゆけどもこの景観の美に吸い込まれそうになる心境を如何ん

ともしがたい程であった。余りにも美しすぎる景観、それはかえって人間を愚鈍にするのではないか。居住者にとつては一層危険な陥穽ではないかとさえ思われる。

矢幡町長がこの町のリーダーとしてその職についたとき、最初に直面した問題こそ、実にこの美しい山村僻地の中の農業者達の所得の向上であった。景美しければ民貧し……だけではなくその愚かさもかなしい程に、更に美しいものとしてそのまま景観の中にぬり込

たのが「生活学園」で住民自らの運営による社会学習の場である。この頃一方では青年達の「町を考える会」のメンバーから三名の青年達選ばれて、イスラエルのキブツ研修旅行というこの山村にすれば青天の霹靂の海外派遣の事業がとりあげられた。昭和四三年ごろのことである。

それは単なる語呂合わせの遊びごとではない。第三次NPC運動が「ニュー・パラダイス・コミュニティ」として具体化を日程にのぼらせる契機を生み出したのは、この若人達のキブツ研修から帰国しての文字通りの成果に他ならない。

イスラエルのキブツで身をもって真の労働の価値と共同体の姿を体得して帰ってきた三人の青年は、新しい町づくり——コミュニティ運動の先頭に立って活躍をはじめた。住民の連帯意識をもちあげるための様々な実践活動が展開した。映画はその自主的な住民サイドのプランによる行動を記録的にとらえてゆく。そうすることによって、我々自身の側の創作と生活に関わる行動の中の矛盾が不協和音として残しつつも、作品という第三次元で

の世界形成がなされてゆく。それは又、大山住民のそれまでの全体験の

められていた。町長はこのぬり込められた農民の知力の再開発を痛切に感じたのである。

●NPCは単なる語呂合わせではない

時に中央では零細農民の都市への流出（それは高度成長政策・所得倍増計画に基づく農業の構造改善によるもの）に支えられて、大都市工業化の繁栄をもたらそうとしていた。都市は過密化し、農村は過疎化への道を歩みはじめた。脱農政策をとらなかつた大山も、後継者不足の悩みはおおうべくもなかつた。町長は農協と村役場とをひとつの総合庁舎の中において、その施策も総合的にとり組んだ。農業高校へ行く後継者に毎月三千円のやりっ放しの育英資金を農協から出したのも、青少年の流出を防止し農業による所得の拡大を第一とする教育施策のあらわれであった。

ところが、この地方にもうひとつの問題があった。農業を直接的にやらない階層——素封家の子弟達のうち余裕があるものは猫も杓子も大学へ行つてしまい、所得と知力ができると村へ戻つてこない。

だからただ知力を上げることと、所得を増やすだけでは十分ではない。つまりもうひとつ、これに加えて環境づくりを考えなくては

映像的再現として目論む我々の視点をさらに一步前面に押出すほどの新鮮さと熱っぽさをもつて演じられていった。さらにそこへひとつの未来像としての、あるいは全く予期せざる事態としての多くの行動を記録し得る可能性が見い出されていった。そのひとつの例は、ある日突然にこの町を訪れてきたイスラエル青年の登場である。姉妹町村としての公式の使節ではなく、その二人の青年達が来訪したのは、去る日大山の三人の青年達がキブツとともに働き、学んだ仲間であった。

大山を日本のキブツ実践地区と見、そこへ友を訪ねてきたとき、彼等は果してなにを見ただけであろうか！ 何ら変ることない自然のいとなみの中に於ける人間の問題として、そこになにか共通の姿を見つづけることができたであろうか。なんらの差別も搾取も階級もなき社会、「もうひとつの社会」の実感をそこに得ることができたであろうか！ それはむしろ反対であり、彼らのキブツに於ける全体験に対する空白感を与えたのではないかとさえ私は思える。そして、大山住民の全体験を彼らは異邦人であることのハンディキャップをのり越えて感得することができたであろうか。それが不可能であることの意味を彼ら

は知っているであろうか！ あるいはその可能性を大山での滞留のあいだに見つけることができたであろうか。私達にとって「大山」が「キブツ」になり得ないこと、「キブツ」自体の中にその可能性を見出し得ないことを映像の中で大山の実体を通じ、いやでも実感してきた。そのことは決して「キブツ」の否定ではない。大山にはあらかじめ失なわれていたものの回復を求めようとする人々の心がある。それは共同体思想の発展につながる哲理であり、住民の中に潜在している意識の醸成へと結びついていくことのできるものにならぬ。

記録映画「わが愛する緑の町」は、その解答をあらかじめ放棄したところから始められたものと、ここに述べざるを得ない。大山の町の隅に、ひとり黙々と二万本の鶏頭の花を植えてきたという今年八〇才になる深山老人がいる。その行為の中に、そして真赤に燃えさかるその花のさえぎえとした色彩の中に限りない願望を託して、私達はこの記録映画の幕を閉じたのである。

(この映画に関する問い合わせは、東京都中央区日本橋本石町四十一電話二四一六〇三一 映研株式会社まで)

海外ミニ情報

ミニへの問・なぜ? いかん?

「教会という場が人間生活とどんなしかたで関係しているか、という問の持つ直接性は、我われと、そして何らかの形でこの場に関係する人とはあい異って表現されるだろう。」

「具体例として、場に対する個人、および集団のあり方などあげられる。場は多様であり、その多様性に比例して関係そのものも多様化せざるをえない。基本的には、我われが現実を持つ場—家庭、職場など—と教会という場の位相差を調べねばならぬ。」

「生活は常にある場を要求する。この場と個々人の関係のあり方が共同性を内包すると言うことができよう。」

フランスの国際コミュニケーションセンター(Centre Communautaire International)が我われに送る言葉は、こうした基本的問いかけを含み興味深い。かれらは、実践活動を通じて投げかけあう様々な問、試行、解決を、その隔月刊誌「国際コミュニケーション」(Courrier Communautaire Inter-

national)に紹介、再度問いかけている。かれらの運動は一九六五年二月に公的に開始され、労働を通して人間性の革新を志す人々に、共同生活の実践、研究をうながす。その分野は様々であり、教会、および社会の種々のできごとを、可能な限り広範な方法を用いて分析しようとしている。また、絶えず国内外をとわず活動体と交換を持ち、その探求をおしすすめている。

かれらの基本的態度は、ここ—今あること—への絶えざる問と、あり方の模索にある。しかも両者は不可分である。場とは志向されるものでなく、常にここにしかない。それゆえ、かれらはここへの言葉を徹底的に追い求め、そこにかれらのあり方を見い出す。ここをみつづけるうちに「なぜ」が生まれ、そこに行為する所に「いかん」が形造られる。その移りゆきは飛躍でありながら、そこでしか何もなしえない。そこでかれらのうちに、教会という場がつかない場として注目されるのである。共同体は場と関係とへの志向である。

(連絡先—Revue de Centre Communautaire International—8,Avenue des Franciscains, 1150 Bruxelles.)

キブツ研修生家族会

去る五月十四日、東京の家の光協会で第九回キブツ研修生の家族の集いを開催したところ、出席者七十余名という盛況であった。家族会は相互連絡のために毎年開催しているが、今回のように全国的に大勢出席者があったのは初めてであった。これは、年毎にキブツ研修生が増加するように、一般にもキブツ理想社会に関心を持つものが増加したためであろう。

この日は、まずキブツ研修生の生活ぶりを知ってもらうために、八ミリ映画でキブツでの研修生たちの日常生活を観賞してから、協会の手塚常任理事から、キブツの内容、キブツ研修の意義、中東紛争に関する見解など一時間余りの説明があり、そのあと質疑応答、懇談に入り、次回の開催を八月中旬と決定して散会した。

あれから半月後、五月三十日午後十時三十分(現地時間)、イスラエル主要都市テルアヴィヴ空港乱射事件の勃発、しかもこ

れがこともあろうに日本青年の蛮行とあっては、研修生の家族の方々も吃驚されたことであろう。

その後、協会への電話の問い合わせもしきりである。協会では現地やイスラエル大使館とも連絡して情報を得ているが、それによると現地はいたって平静であり、日本のキブツ研修生に対しては、かえって親切に慰めてくれるほどで、何の不安もないという。もちろん、家族の方には現地からそれぞれ詳しい書面もあることだろう。ご心配なく、日本の将来とキブツ研修の意義を正しく理解していただきたい。(手塚信吉)

キブツのベンヨセフ氏くる

イスラエルのキブツ、ササの一員であったアブラハム・ベンヨセフ氏(55才)が、日本の共同体の一つであるヤマギシズム北海道試験場で長期間滞在すべく、去る五月十一日に来日した。

氏は英国に生まれたユダヤ人で、中年になつてからイスラエルに移住しキブツに参加した。キブツや共同体に関する独自の見解を持ち、『世界で最も純粋な民主主義』、『二十世紀—古代史』などの著作もある。日本に着いて以来、彼は北海道教育大の草刈善造教授などと共に精力的に各地の共同体を訪問し、現在はすでに「北海道試験場」の一員として生活している。

民族や国家の枠をこえてよりよき共同体社会の建設を希求している彼の存在が、日本の運動の中で貴重な役割をはたすことになるに違いない。氏の豊かな学識と対照的なたくましい掌が印象的であった。

